

「恥を知る」日本人の道德観はどこへ行ってしまったので
しょうか？」

平成 28 年 6 月 21 日

●塾講師 A さんからの質問

こんばんは。いつも大変お疲れ様です。ヘイトスピーチ解消法にかんする議論の推移、そしてそれに対する曲解が収まらないことに大変心を痛めております。ついに、日本人の日本人らしさも完全にとろけてしまったのではないかと悲しくなります。従来、日本人の、総体としての道德観の高さについては、私は心のどこかで信じていたところがありました。「恥を知る」ということは、文化の深いところに根付いていると思っていました。ところが、このヘイトスピーチはどうでしょう。こういうものを容認する勢力は、まかり間違っても保守ではないと私は思います。そして、国旗国歌法と同様、罰則規定がないことが肝であることはきちんと理解されねばならないことだとも思います。本当は、法律がなくても、国旗国歌は尊重されるべきですし、ヘイトスピーチなど起きない世の中でなければならぬのです。本来日本は、もっとおおらかで、人情があって、ある種のやせ我慢があり、恥を知る国であったと思いますが、この現状を生んでいる原因も、反動として出てくるヘイトスピーチも、ともに戦後教育の賜物であると思うと、やりきれません。どうしたら国柄を取り戻せるのでしょうか。西田先生のビジョンをお話いただければと思います。

●西田昌司の答え

全く同感です。

私は今回のヘイト騒動を見て一番感じたのは、日本人のモラル — あ
るいは文化力と言ってもよいかもしれませんが — が著しく失われているとい

うことでした。一例を挙げると、デモの主催者が事前にデモのコール文を私の事務所に送りつけて私に添削を要求するといったことまで発生しました。そもそもデモを主催する側の人間が、自らの言動がヘイトスピーチに該当するかどうか、人として許される言動なのかどうかはわからないとは冗談のようななんとも情けない話ですし、そうやって私を挑発するのが恥さらしな振る舞いだということにこの人たちは気付いていないのです。

私は当初、ヘイトスピーチを解消するための法を作るのではなく「ヘイトスピーチは許さない」と国会で決議して済ませようかと思っていましたが、調べていくとヘイトスピーチの状況があまりにひどく、決議等で済ませられるようなものではないと感じさせられました。とは言っても韓国や北朝鮮の政治姿勢について批判するといった自由は認められるべきなのは当然ですから、我々はヘイトスピーチ解消法において禁止・罰則条項を設けずに言論弾圧法にならないよう十分に配慮してきました。

ヘイトスピーチ解消法の批判の中で「日本人の外国人に向けた差別的な言動は許されないと謳いつつも、外国人の日本人に向けた差別的な言動には目を瞑っており、これは一方的な日本人差別法だ」といった批判がありますが、これも全く違います。私は国会での議論において、日本人への差別的言動が許されるわけもないことはしっかりと答弁していますし、私の答弁が法律の解釈として生きてきますから、日本人差別に悪用される心配もありません。

私は国会での答弁やインターネット上での動画の発信を通じて、ヘイトスピーチ解消法についての皆さんの疑問についてはしっかりと答えているつもりなのですが、私の話には耳を貸さずに騒ぎ立てる方があまりにも多く、私が何を言っても批判の対象にしかならないという状況が続いています。ある特定の人物の言動をあげつらってさらし者にして皆で叩いて喜ぶというのはよくある話ですが、今行われている舐添叩き現象にも同様のものを感じてしまいます。

舐添さんの場合、政治資金規正法に抵触するかどうかと考えるとそういっ

た度合は少なかったのだと思います。しかし、法には触れずともやっていることがあまりにせこく感じられますし、1000万人の都民のトップとしてはふさわしくない人物だということが皆に知れ渡ってしまいました。政治資金報告書を書く場合は、法律に違反しているかどうかは当然問われますが、それ以前に日本人としてのモラル・美意識に適った報告になっているかを舛添さんは考えるべきだったのだらうと思います。かと言ってそういった不祥事を起こす政治家を選んだ有権者に全く責任がないかといえばそうではないでしょう。

舛添さんは知名度が高くタレント的な要素が非常に強い人物ですし、それゆえに都知事選では圧倒的な票を集めて当選しましたが、ひとたび今回のような疑惑が出てくると寄ってたかっての集中砲火を浴びてしまいますし、おそらくこのまま知事を辞めざるを得ない状況になると思います。各都道府県の知事だけでなく国会にも、知名度があるというだけで選ばれたいわゆるタレント議員が多くいますが、そういった議員を選んだ有権者は真剣に考えた上でその議員に一票を投じたのでしょうか？ただ面白ければよいという軽い気持ちで投票されたというのが大半なのだと思います。有権者の側にも政治家を選ぶという責任があるということを忘れてはなりません。

政治家も有権者と同じ人間ですから、政治家ばかりが清廉潔白さを求められるのはどうかというところもありますし、あまりに綺麗事ばかりを言って政治家に無理難題を押し付けてしまっただけはそのうちに政治家になりたいという人間もいなくなってしまう。もちろん政治家は国民の代表として自らを律していかなければならないのは当然ですが、政治をあまりに雁字搦めな^{がんじがら}世界にしてしまえば綺麗事を並び立てる政治家ばかりになってしまって国民も幸せにはなりません。

有権者の側も、もし自分が政治家として選ばれる立場になったらどこまでのことがやれるのかと想像していただきたいのです。有権者が政治家に要求しているレベルのことが、有権者が逆に政治家の立場になったら本当にできるのでしょうか。相手の立場になって考えたら、これはちょっと言い過ぎか

など自らの言動を慎むこともできるはずでず。ヘイトスピーチに關しても、ヘイトスピーチをしている人は逆に自分が口汚い言葉を浴びせかけられたらどう思うかと自問していただきたいのです。相手の立場を考へもせず一方的に高い要求をするのは寛容さのない病的な社会だと思ひますし、人としてお互いが許しあえて、かつ議論もしっかりとできるような社会にしたいものです。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>